

仁杉 巖

NISUGI Iwao

1915年東京生まれ。工学博士。1938年東京帝国大学工学部土木工学科卒業。鉄道省入省。鉄道技術研究所、大阪工事事務所、名古屋幹線工事局長、東京幹線工事局長、本社建設局長、常務理事、第66代土木学会会長、日本鉄道建設公団総裁、日本国有鉄道総裁。西武鉄道取締役社長、FM埼玉取締役社長、FKK取締役最高顧問などの要職を歴任。専門はコンクリート、鉄道マネージャー、著書に『挑戦 鉄道とコンクリートと共に六十年』（2003年（株）交通新聞社）など。



も卒論のままで実際に働いています。大学4年のときは北大の創基80周年だったのですが、このとき清瀬文部大臣が来て北大に日本最初の衛生工学科をつくることになりました。そこで、学部長に呼ばれ、その要員として新しい勉強を始めることになったのです。大学院の1年のときは、医学部に預けられ、細菌学と公衆衛生学を勉強しました。その後、アメリカのフロリダ大学で化学を勉強しましたから、その三角形の中で人生の仕事を組み立ててきました。でも根は土木屋ですから、発想としてはそれらを地球上にどう落とし込んでいくかという話なんです。水をきれいにするというのが化学工学屋の発想なら、われわれの場合は、きれいな水をどここの空間に残し、どうシステムを組めば国土がよりよく使えるかという

ことを考えます。そういう発想は土木屋にしかでないもので、私は土木屋で良かったと思っています。——土木という分野に携わる技術者に今求められていることは何ですか。また、組織のマネジメントについてどのような考えを持っておられますか。

自分たちの判断で 現場を動かす

仁杉——土木屋というのは、やはり現場をやらなと意味ないと思う。僕なんかも、だから、さつと現場に行つてしまった。

丹保——私は、日本で最初の水質基準を石狩川と江戸川で決めるというので、ずっと石狩川の上流から下流まで2年間歩き通しました。やはり、フィールドに出なければ、研究室だけではわかりません。研究室だけの勉強では、畳の上の水練しかやつていないようなものですからね。

仁杉——僕はコンクリートで論文を書いて、理屈もやりましたけど、やはりやりたいのは、東海道新幹線をつくるとか、ものををつくることでしたね。

丹保——東海道新幹線に携わるなんて、土木屋の中では本当に夢ですよ。

仁杉——あの仕事は、上から干渉されずにやれたんです。私は、技師長の島秀雄さんの下に3年くらいいて、土木以外のこともいろいろ勉強し、現場に出ましたが、名古屋管内130kmの仕事で4年間で自分のしたいようにやれたというのは、土木屋としては楽しかったですね。

用地買収もやりましたが、時間が無いし、金もな